

日本史探究 第7回 授業の進め方とポイント

【第7回テーマとEQ】

なぜ二人の天皇が同時に存在したのか考えてみよう

～南北朝の対立と室町幕府～

【第7回の解説ポイント】

・そもそも鎌倉時代から、朝廷において二つの皇統をめぐる対立があったことを理解する。
→持明院統と北条院統の対立を調停しようとした鎌倉幕府であったが失敗し、それに対する反発もあって、後醍醐天皇による倒幕運動が本格化した。

・建武の新政に背いた足利尊氏は、自らの正当性を示すために京都で持明院統の光明天皇を擁立した。それに対して北条院統の後醍醐天皇は吉野に逃れて南朝を開き、以後の二つの朝廷の対立を南北朝の対立という。

・北朝の足利尊氏によって室町幕府が開かれた一方で、南朝の勢力は小さくなる一方であったが、室町幕府内部での対立や荘園の混乱などが続いたため、南北朝の対立が長引くことになった。

・南北朝の対立が続くなかで、各国に置かれた守護の権限が拡大されるようになり、一国全体の地域的支配権を守護が確立するようになった。その結果、各国の守護は領国内の地頭や国人などと主従関係を結ぶことによって、守護大名へと成長していった。

・室町幕府の政治体制は鎌倉幕府にならったものであったが、将軍の補佐役の管領や、幕府の重要な機関であった侍所の長官である所司は、有力な守護大名が就任した。そのため、室町時代における多くの期間が、有力大名の連合政権のような体制であったといえる。

・そのような中であって、第三代将軍足利義満は、将軍権力の強化をめざして、有力守護大名の力を弱めるとともに、南北朝の統一を実現した。また、義満は将軍・太政大臣と公武両者の頂点を極め、天皇をしのぐ立場をめざしていたと考えられる。

【これまでに出了された留学生からの質問】

・足利義満の時代におこなわれた中国との貿易は何のためだったのですか。
→日明貿易（勘合貿易）による利益を目的としていたことは間違いないが、それに加えて、中国（明）との冊封関係（中国の皇帝が周辺諸国の王に官位・爵位などを与えて君臣関係を結ぶこと）によって、中国皇帝の権威に支えられた日本国王としての地位を確立することを

めざしたと考えられる。